すと、現在2千名を越す有資格者がおられます。つい最近の方々を入れればもっと多いわけですが、この上さらに一人でも多く集まっていただき、今後ますます会を盛り上げ、利害関係のない会として、また本当に楽しんでいただける会、仲間として集まれる同窓会にしていきたいと思います。特に、本会発展のため、一層多くの若い方たちに参加いただき、その人たちに、東京同窓会のリーダーシップを担っていただく日が、一日も早いことを期待してやみません。

今後ともみなさんのご協力、ご指導をよろしくお願いいたしたいと思います。また、ご意見などありましたら、どんどん事務局のほうへお申しつけ下さい。

●来賓祝辞●

能代高校同窓会会長　神馬恒成氏

昨年に引き続きまして、再度のお邪魔でございます。今年も多数の同窓の方々にお目に掛かれ、また会の隆盛を目の当たりにいたしまして、大きな喜びとともに、誠に心強さを覚える次第でございます。

さて、同窓会も能代を始め、秋田、東京などと各地で隆盛でございますが、それを見るにつけても、これからの同窓会は、今後のあり方を今一度考える時期に来ているような気もいたします。ただ単に同窓で学んだ過去を振り返り、懐かしむのではなく、今日の会合がそれぞれの現在の生活に、何かをもたらすものでなければなりません。ただ今、事務局長さんが、利害関係のない会として、十分楽しめる会として、発展を見て行きたいと申されました。その通りでございます。

同窓会は、とかくクラス会の集合体になりがちです。あちらでは何期の人たちが、こちらでは何期の人たちがと、旧交を暖め、思い出話に花を咲かせます。もちろんそれも結構です。しかし、それだけではもったいない。能代高校も、旧制1期に始まって、新制もやがて40期の卒業生を、世に送り出すに至ろうとしております。これだけの歴史を持つわけですから、その歴史をもっと有効に生かすことを考えてよいのではないでしょうか。つまり、横のきずなをより強固にすると同時に、縦の人脈作りとでも言いましょうか、そういうものにもっと積極的に、果敢に取り組んでいいと思います。各自がそういう姿勢をもってこそ、この同窓会も果てしない発展があると、考える次第でございます。

加賀正隆能代高校長挨拶

おかげ様で、能代高校も在籍者数九百八十名余り、一学年7学級、いわゆる普通課程、進学校としての面目を保っております。

ただ、ちょっと気にかかることは、先輩方のいろいろな激励にもかかわらず、最近、部活動が低迷しておることであります。52、53年の甲子園出場の時のような覇気がなくなってきているようで、残念であります。私の考えとしては、部活動がキチっとできて、そちらの面でも、いわゆる名のある時には、進学もよくなるということが言えると思います。どちらが根底となるかは別として、現在、生徒の覇気というか、挑む姿勢といった点で、ちょっと気がかりなところがございます。

いずれ何らかの施策をもって、補強すべきは補強しながら、その強化を図って参ります。能代高校には、現在十五の体育部があるわけですが、その中でも、野球はもちろんのこと、かつての名門である体操、バレーボール、この3つをまずいろいろな形で補強したいと思い、神馬会長とも話しております。その結果は、今まだどうということは申せませんし、残念ながら、今年の夏にその成果を見ることはできませんでしたが、臥薪嘗胆（がしんしょうたん）という言葉もございます。来年を期して一つということで、一層の努力とテコ入れをいたしております。いずれにしろ、この姿勢を核としまして、学校の態勢を整えていきたいと思っております。

樽子山から、機織の田圃のまん中の高塙へ移転して以来、すでに拾数年になります。前の市長さんのお話で、「あそこへ移ったことは、いろ

いろな面で市のマイナスだな～」とか言われたことを、覚えておりますが、ただ、樽子山の伝統と言いますか、先輩諸兄の能中時代からのそれを、なんとか高塙の地に、再び花開かせようと、歴代の校長もいろいろ心を砕いて参りました。

そういう諸先輩の努力で、学校らしくなりました。われわれも松陵健児の精神を育むと同時に、今後さらに、雨天体育館や図書館などの内部設備、あるいは、学校周辺の地盤整備などを考えていこうと思っております。

同窓生の方々には、特に本日お集りの先輩諸兄には、いつも遠い所から学校を心配していただいて、本当にありがとうございます。伝統は単に守るべきではなくて、時代時代の実績を、そこに積み重ねていく。そうしてこそ、先輩の意志を受け継いでいけるもの、と思っております。そして今、そういう実績作りに励んでいるところでございます。今しばらく、暖かい目で能代高校を見守り続けていただくことを、心からお願い申し上げます。

●会長より講演者紹介●

ここにご紹介する斉藤忠生さんは、たいへんな変わり種でありまして、能代高校を出てからテナーとして、今、日本で知らない者がいないくらいの活躍をされておる。テナーとしてだけでなく、芝居もやるんですね。しかも、秋田弁でしゃべる芝居が最も得意でして、つい最近も魁新報の主催でしたが、山谷初男さん、佐々木愛さんと3人で1ヶ月間に渡って、秋田県内各地を芝居の公演で回られました。「結婚申込み」という翻訳物でございましたが、これが、もう抱腹絶倒、秋田の衆でなければ全然わからないですね……ええ私も行きましたけれども。たとえば、クサレタマグラなどという秋田弁も飛び出す。今時、地元にもこんな言葉がわかる人は少ないのではないかと思うのですが、そういう秋田弁でペラペラといったお芝居でして、大変感激いたしました。

キャリアを拝見しますと、我が山本町北金岡中学校を経て、能代高校を卒業。それから悪戦苦闘、二期会会員、すばらしいテナーとしての今日を築いたわけです。本日は、後ほど懇親会で、歌のご披露もいただく予定ですが、その前にお話をちょっとうけたまわる。「ワダシ、ウダッコダバイイドモ、シャベルノ、ヤダス」なんて、カッコつけておりますが、ま、そういうことを言わないで、10分でも5分でも結構でございますので、よろしくお願いいたします。

講演

人生に歌あり

斉藤　忠生氏（新制15期）

もうしわけありません。こんなすごい先輩の方たちを前にして、ああ、びっくりした、という感じです。本当にしゃべることなんて、資料もないし何にもないんですが、会長がどうしてもしゃべれと言いますので、こうなりゃどうでもいいや。この際腹くくることにします。

今日ご出席の武重先生などに「ばが、おめ、知らねが、ばがけ！」とクソミソにこきおろされ続けた、秋田時代はさておきまして、東京へ出てきた時からのお話をいたします。

ほかに何もできないから、東京で歌でもうたおうかと思って出て来たんです。ええ、それは、まあ最初からそう思って。何しろ右も左もわからず、出て来たんですが、上野の駅を出まして、僕はその時、多分上野広小路の鈴本の前辺りを通ったんで、そこで気が付いていれば、ひょっとしたら、林家三平師匠の弟子か何かになっていたかも知れません。

たまたまその反対側のアメ横を通って御徒町へ出た時、そこにアルバイトサロン「宝島」というのがありました。ええ、そのアルサロの下に「バンドボーイ募集」と出ていたんです。明日から飯食わなきゃならんし、しようがないからと思って、そこへ飛び込みました。たまたま「やってみろ」ということになって、それからそのアルバイトサロンといういかがわしい所で、僕は仕事を始めたんです。それが僕の音楽のきっかけでございました。

そこで、そのバンドをしばらく続けることになりました。そのバンドマスターは武蔵野音大を卒業した人でしたが、そのバンマスがある時、「おまえにはどうも、演歌とかポピュラーの曲は合いそうもない。おま